

のまま泣き寝入りになってしまった。

今日も暮れゆく 異国の丘に

友よ辛かる 切なかる

シベリア抑留の悲哀と戦後の暗い世相を伝えて今も歌い継がれている「異国の丘」は、どれほど人々の心にしみ入ったことであろうか。それはシベリア抑留者が現地での自分達の心情を自ら綴った詩ならではの「心のうた」である。疲労、酷寒、飢えに倒れた同胞の屍に合掌しつつ、筆をおく。

帰国への道

鳥取県 細木 明 男

ダモイの港ナホトカ

中央アジア、カザフ共和国のクズオルダ収容所に送り込まれていた私達は、悪夢のような捕虜生活を終えて、祖国日本への帰還の喜びをかみしめながら、ナホトカ港にやっとの思いでたどり着いた。昭和二十二年

七月四日の夕刻も間近い頃であった。

抑留者帰還の最終集結地であるナホトカは、乗船するまでの間しばらく滞在させるため、バラック建ての収容所が多数棟建っており、シベリア奥地から引き揚げてきた同胞の抑留者ではほとんどの建物が満員の状態であった。

私達は、あたりが薄暗くなってきたのに建物の中に入れてもらえず、広場のような所に集められた。その広場の正面には、仮設の舞台のようなものが設けられていた。

やがて、一人の男が壇上に上り演説を始めた。照明の明かりもないので、どのような人物か分からなかったが、声の調子からして二十代の若い男のようであり、また語調から察すると、かなりの学歴のある人物のようでもあった。

演説の内容は、言わずと知れたスターリンとソ同盟に対する讚美、日本軍閥と財閥のこきおろし、果ては天皇制の打倒に及び、続いて祖国日本を共産主義により民主化しようというものであった。私達への今まで

多大な犠牲を払ってきた労役に対するねぎらいの言葉など、ひとかけらも出てこなかった。

演説が終わると、同じアクティブの連中であらうか、数人の者が舞台上に上り、アコーディオンを抱えた男の伴奏により「赤旗の歌」の練習が始まった。何しろここに来て初めて聞かされた歌でもあり、戸惑いながらの練習であったが、何回も繰り返し返して歌わされているうちに、歌詞もどうやら覚えたようだった。「赤旗の歌」が一段落すると、今度は「憎しみのるつぼ」という歌に変わり、あたりが真つ暗闇になるまで練習が続いた。

ようやく広場の集会から解放されて収容所の建物に入ったが、各棟ごとに担当のアクティブが決まっているのかどうか知らないが、一人の男が絶えず私達の言動に注意しているようだった。そして暇さえあれば、皆を集めてアジ演説を飛ばした。

時には、敗戦後の日本国内の状況について、さもよく知っているような話をして私達の関心を呼んだが、ある時、中年の応召兵と思われる人が、戦後日本の中

小商工業の状況と将来の見通しといったような質問をして回答を求めたところ、しどろもどろで答えにならず、さもありませんかと思つたものだ。

このアクティブの連中は、皆が日本の軍服を着ており、無論階級章などは外しているが、身なりは誰もこざっぱりしていて、私達のような乞食同然の姿とは格段に違っていた。そしてお互いに「さん」づけで呼び合っていた。そして、我々のようにシベリアの辺地まで囚人扱いで送り込まれ、飢えと酷寒にさいなまれながら塗炭の苦しみを受けた者とは違って、何か特別扱いでもされているように見受けられた。

カザフ共和国からナホトカへ至るダモイ列車の中で、旧軍隊の階級章を取り外すよう伝達があった。それとともに、最近シベリア奥地からナホトカに集結したある部隊が、旧態依然として旧軍の階級章を付けたままであったのがナホトカのアクティブの目にとまり、民主化ができていないとの理由で批判された揚げ句、再び奥地に逆送されて、帰国の乗船ができなかったという情報も伝わった。

このことがもし事実だったとするならば、彼らこそ、シベリア全抑留者の中でも、民主運動という名のもとに生殺与奪の権を握っていた特権階級であった証左でもあろう。我々はナホトカへの輸送の途中で事前にも然るべき措置をしていたから事なきを得たが、同じ日本人であるアクティブの連中の動向には、少なからず恐怖心を抱いたものである。

さて、ナホトカにおいて乗船のため待機すること数日、その間三回にわたり収容所の建物を移動させられた。時たま糧秣運搬等の使役に駆り出されることもあったが、私達を乗せて日本へ帰る船が入港するのを今日か明日かと待ち望む毎日であった。

私達が収容されている建物の隣の棟に、見ればすぐそれと分かる元将校の一団が収容されていた。軍服の階級章は取り外しているのに、元大尉なのか、中尉なのか、はたまた少尉なのか全く分からないが、この将校団の集団規律はまことに厳しく、あらゆる行動は整然として行われ、労務使役なども積極的に行っていた。

ある日の夜半のことである。この将校団の棟が夜のしじまを破って突然騒々しくなった。少人数の声ではない。少なくとも数十人の声が飛び交い、怒声と喚声も交えてただごとならぬ様子なのである。時折「赤旗を立てエ！」という叫び声も聞こえる。一体何事が起きたのだろうと目を覚まし、聞き耳を立てた。

ところが、この騒ぎを聞いて一人のアクティブが駆けつけ、大声を上げて制止しようだったが、その途端、一斉に水を打ったように静かになった。そして暫くの間このアクティブの説教が続いていたが、その後は何事もなく次の朝を迎えた。

翌朝になってから、昨夜の出来事は一体何だったのだろうと考えた。ひょっとすると、かの将校団の中に反動分子がいて、そのために全体の立場が悪くなるのを防ぐカモフラージュだったのかも知れないとも想像したが、私達はその真相を知るよしもなかった。

残留、そして逆送

さて、ナホトカで乗船待機すること三日間、四日目になってようやく乗船命令が出た。そして港の埠頭に

集まって、ソ連将校の命令に従って整列した。

その時、縦隊の先頭の方から後方にかけて、各自、姓名の頭文字がロシア語のアルファベット順になるよう整列させられた。その数は約千二百人で、私は縦隊のかなり後方に並ぶことになった。そして、ソ連軍の将校が手に何やら書類を持ってしばらく通訳と話しているようだった。

ところがである。やがて先頭から丁度一千人のところで区切りをつけ、そこまでの者は船に乗るよう指示された。私はその一千人の枠外にいたので、一瞬呆気にとられると同時に茫然としてしまった。つまり、私と同様に隊列の後方に整列させられた者約二百人は、遂に帰還の船に乗ることを許されず、引き続きシベリアの地に残留させられることになってしまった。

見ると、対岸の埠頭には日本から迎えに来た引揚船が停泊しており、今し方乗船を許された同胞は、駆けのように急ぎ足で乗船場へ向かって行く。私達は言うに言われぬ思いでそれを見送った。その時の悔しさと悲憤の情は今もって忘れることはできない。

同胞達の乗った引揚船の出航を見送る間もなく、私達はせきたてられるようにして鉄道の列車がとまっている所まで連れてゆかれ、幾両かの連結された車両に乗り込んだ。やがて列車は動き出し、ほんの数日前にナホトカ港へ向かった線路を、今度は逆の方向へ向かって走り続けた。

このようにして、わずか四日前に折角たどり着いたナホトカではあったが、今ではまたもや祖国帰還の夢も破れ、引揚船を目前にしなから、再びシベリアでの労役に服するため逆送されることになってしまった。

不運に見舞われた私達は全くなす術もなく、腹立たしさをこらえきれず、口々に「畜生!」「こん畜生め!」「何たることだ」と怒りの声を上げた。それは未だに捕虜の身から脱し得ない悲痛の叫びでもあった。

鉄道作業

私達が乗せられた車両は古色蒼然たる寝台車で、上中下の三段になった寝台に起居することになったが、引込線のある停車場に着くと、そこを基地として幾日

か停留し、鉄道線路の古びた枕木の交換作業をやり、そこで作業が一応終了すると、次の地点へと移動した。

移動した地点は、ナホトカからウラジオストックを経てウオロシロフ（ウスリースク）に至る間で、この三カ所を除いてはスーチャン、チグロバヤ、カンガース、マイヒ、クノーリといった地名の所で、辺鄙な田舎や山の中であった。

鉄道の枕木交換作業は、ソ連人のエンジニアがあらかじめ新品と交換すべき古い枕木に目印を付けておき、それを我々の手で交換するのだが、まず枕木が埋まっている周辺をショベルで掘って土を取り除き、イヌ釘を抜く。そして大きな鉄製の挟み道具を使って片方の脇から引き抜く。次に新しい枕木を差し込んでイヌ釘を打ち込み、最後に土の埋め戻しをして終わる。

そして、この作業の場合も例外なくノルマが課せられた。一人一日のノルマは五本ぐらいであったが、一個班五人の場合、一日に二十五本の枕木を交換しなければならぬ。

シベリア鉄道の広軌の枕木は長くて太く、これを二人掛りで担ぎながらの運搬や柄の長い大きなハンマーを振ってのイヌ釘打ちは、空腹と体力の消耗した私達には重労働そのものであった。

絶食

さて、私達のこの移動作業隊の食料は、停留した場所ですら一定期間の量を調達し車両に積み込んでいたようだったが、時には次の調理の場所との時期が必ずしも一致せず、ややもすると食糧が途切れがちであった。

ある時は、どうしたわけか食糧が皆無の状態になって、まる三日間何も口に入れる物がなくなってしまう。その時は止むを得ず作業は中止となり、全員が車内に横たわって動くことさえできなくなった。食べる物が全くなくなってしまう一日たつと無性に腹が空いていたたまれなくなり、二日目になると、これまで気が狂いそうになる。更に三日目になると意識が朦朧となつて思考力が次第に薄らいでくる。誰もがものを言う気力もなく、ただ無言で横たわっているだけであつた。

その時である。食物を口にすることができなくなつてからまる三日を過ぎた頃、小さな角砂糖が一個ずつ配られ、それを口に入れてしばらくしたら、体温が少しづつ温かくなつてきたように感じ、何とはなしにものが言えるようになった。平素十分な給与を与えられ栄養をある程度蓄積していたならば、このぐらいの絶食ではへこたれなかつたかもしれないが、何せロクな食糧も与えられずノルマに追いまくられた体ゆえ、この三日間の絶食で一時「もう駄目だ」と観念した。

シベリア沿海州も夏の期間は雨が多い。山間を通る鉄道線路の作業では、雨が降ると、沿線の山の樹々に大きなカタツムリが出現する。これを手あたり次第に獲つては焼いて食べた。また黒い色をした蛇もつかまえて、同じように焼いて食つたこともあった。これにはロシアの警備兵も気味悪がつてしかめづらをしていた。

再びナホトカへ

さて、ナホトカから逆送されることになったのは七月七日であったが、それ以来、各地を転々と移動しな

がらの鉄道作業も終わり、再びナホトカに帰着したのは、次第にシベリアの寒気も厳しくなつてきた十一月二十二日のことであつた。

そしてしばらくの間、引揚船の入港を待つことになつたのだが、十二月に入ると港も閉ざされるというナホトカでは、帰国待機の人影も最初七月に来た時のような数もなく、比較的静かな感じであつた。

しかし、例のアクティブの連中の活動は活発で、特に青年行動隊と称する一団は、一日に何回となくメイソンの通路を隊列を組み、赤旗をおし立てて「いざ行け、わが同志よ、堅くかいな結びて限りなき自由の国へ、我がはらからと共に」と行進歌を歌いながらデモンストレーションをやつていた。

その中に、軍服をまとははいるものの、その体型から明らかに日本人の女性と思われる隊員がいて、奇異な感じで見つめたものだった。

ある夜のこと、屋外で一人のアクティブと思われる者に出会つた。何とはなしに言葉を交わしているうちに、先方から「自分は元候補生で秋乙の教育隊にいた

ことがある」と言った。「こちらもそうだ」と答えると、お互いに親しみを覚えたのか、しばらく立ち話をした。そのとき「なぜ帰国しないのか」と尋ねると「自分の方から希望してここに残っている」と答えた。防寒帽を被り、ソ連兵士が冬期に履くカートンキ（フェルト製の長靴）を履いていた。ポケットからパピローズの箱を取り出して吸っていたが、名前を名乗ることもなく別れた。

乗船

ナホトカで乗船待機の日を送ること数日、遂に私達の帰国の夢が実現する日がきた。母国日本から引揚船が私達を迎えるために入港したのである。

十一月も終わり頃になると、シベリアの寒気は一日と厳しさを増してくる。この寒さから一日でも早く脱出したい、暖かい日本へ帰りたいの一念で埠頭へ急いだ。岸壁に停泊している引揚船を見上げた時、甲板で働いている船員達は紛れもなく日本人だ。船は貨物船のようだが、日本の文字で「朝嵐丸」と書いてある。日本から私達を迎えに来てくれたのは本当だった

のだ。

乗船のトラップの下でいったん待機し、やがてソ連将校の合図があるや否や、皆はわれ先にと船上を目指して駆け上った。

時に、昭和二十二年十一月二十八日の夕刻、「朝嵐丸」は、数多くの夢を乗せてナホトカの岸壁を離れ、一路祖国日本へと向かったのである。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年十二月一日

住所 鳥取県米子市

略歴 昭和十八年三月 鳥取県立米子中学校卒業

〃 十九年九月 鳥取四七部隊入隊

〃 十月 朝鮮咸興四三部隊へ転属

〃 二十年七月 朝鮮軍管区教育隊入隊

(甲幹十三期)

〃 八月 終戦により抑留、後にシ

ベリアへ移動抑留

〃 二十二年十二月 舞鶴上陸、復員

〃 二十三年四月 鳥取県米子市役所奉職

〃 五十八年二月 退職

〃 六十二年五月 米子市公民館長就任、現

在に至る

(鳥取県 井上 万吉男)

飢餓と望郷の五カ年

岡山県 木下 美知夫

武装解除、捕虜となる

ハルピンはソ連軍の入城前に非武装都市を宣言していたので、市内で戦闘は行われなかった。

終戦の四、五日後の八月二十日前後にハルピン飛行場でソ連軍による武装解除を受けた。将校の軍刀は佩用を許されたが、他の武器は総て取り上げられた。私達は小銃もなく、帯剣を取り外して終わりである。広い飛行場には一機の飛行機もなかった。

武装解除後いったん阿城兵営へ帰った。無論ソ連警

備兵がマンドリン(自動小銃のこと)を肩に掛け腕で抱えて前後左右に付いての帰営だった。現地人が荒らしたと見え兵舎内は大変であった。それでも被服類は新しい物と取り替え、持てるだけ背負袋や雑囊へ詰め込んだ。さらば阿城よ、再び相まみえむ。

一日、二日おいて阿城の東香坊駅まで徒歩行軍し、そこで無蓋貨車へ乗せられて横道河子まで輸送された。横道河子で下車させられたが、これはソ連軍の侵攻がこの地まで戦闘状態で行われたので、ここまでは牡丹江方面からソ連軍が列車の軌道(レール)を広軌に拡張していたので、私達の乗った満鉄列車は走行できないためである。

横道河子から海林の燃料廠跡までは徒歩行軍だった。この行軍中には、敗軍の惨めさと哀れさをまざまざと教えられた。一般邦人のほとんどは開拓団の人達だが、軍の庇護はなくなり、終戦直後に行われた関東軍の補強のために中核たる壮年者の応召によって労働力と指導者を失い、老幼婦女の集団が途方に暮れて北から南へ、西から東へと移動をする様は誠に悲惨で言